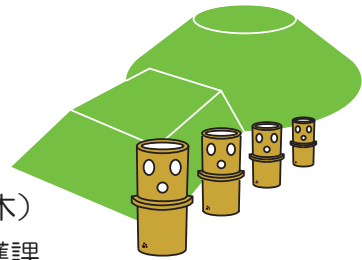


京都市内の埋蔵文化財発掘調査速報 No.0 3 3 (R 4 - 1 1)

やまだ さくらだに ごうふん 山田桜谷 1 号墳

調査期間：令和4年12月21日（水）～ 令和5年2月9日（木）
調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 はじめに

調査地は西京区山田桜谷町ほかの国有林内に所在する山田桜谷1号墳です。山田桜谷1号墳は「乙訓古墳群」のグループに含まれる古墳の一つです。乙訓古墳群は桂川右岸域・乙訓地域に広がる古墳群で、古墳時代前期初頭から終末期まで首長墓が築造された全国的に見ても希少な古墳群です。そのうち、遺存状況が良く、年代などが固まったものから国史跡に指定されています。山田桜谷1号墳も乙訓古墳群の北端の首長墓の状況を確認する目的で、発掘調査を実施することとなりました。

山田桜谷古墳群は、昭和61年に（財）京都市埋蔵文化財研究所の職員が踏査中に発見しました。発見時に採集した埴輪や須恵器の年代から、築造時期は5世紀後葉と推定されています。昭和63年に京都大学考古学会が測量調査を行い、平成30年には京都市がレーザー測量を実施した結果、前方部や側面側に直線地形があることを確認しました。これは、古墳造営時の造成痕跡の可能性あります。その後、令和2年度にさらに詳細な測量調査を実施し、今回、初めて本格的な発掘調査を実施することとなりました。

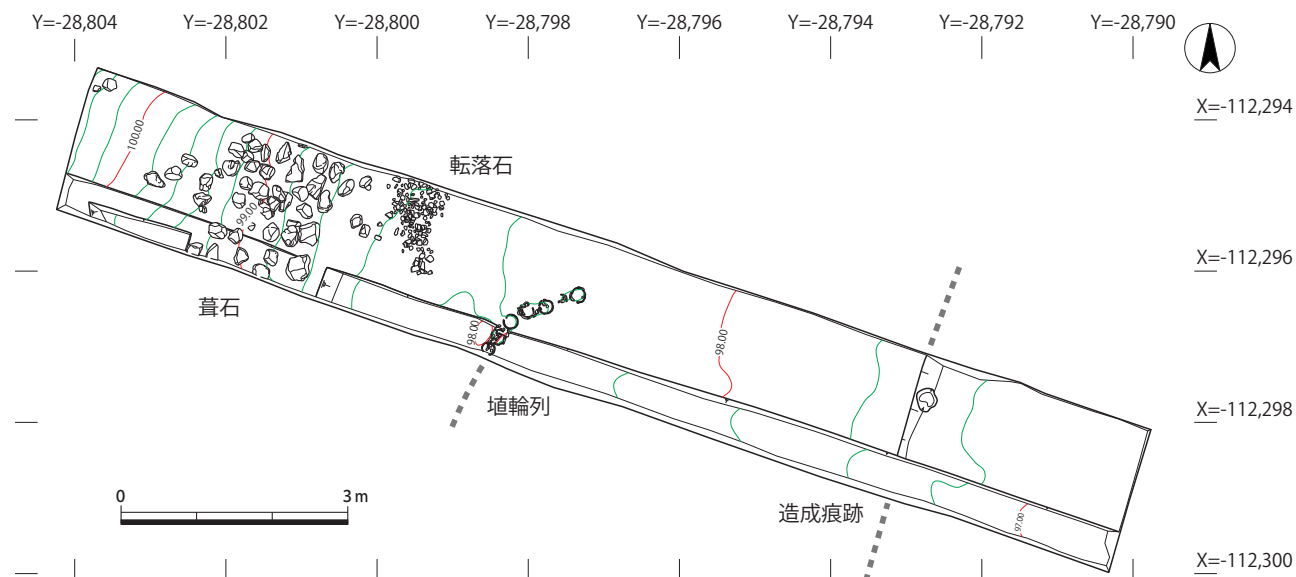


図1 調査区平面図 (1 : 100)

2 今回の発掘調査成果

調査区は古墳の前方部の状況を確認するため、古墳の中軸に合わせて前方部側に設定しました。その結果、葺石、埴輪列、古墳の造成痕跡などを確認しました。

葺石 調査区の中央付近で、葺石を確認しました。石材は約25～40cmの大きさで、材質はチャートや砂岩が用いられていました。この葺石の最下段には、上段で確認した石より一回り大きい石が直線的に並んでいました。この石より下には転落石以外の石が存在しないことや、上段の石とは規模が異なることから、葺石の基礎となる基底石と考えられます。また、葺石の設置方法も注目されます。山田桜谷1号墳では、石の重なりが少なく、隙間をあけて施していることを確認しました。石を据えた後、古墳の盛土に埋め込むように設置しています。一般的に葺石は墳丘の盛土を構築した後に石材を隙間なく積み上げていきますが、本古墳は盛土を構築しながら葺石を設置しており、盛土と葺石の施工を同時に行っていたことが分かります。このような葺石の施工事例は、同じ乙訓古墳群内では向日市に所在する物集女車塚古墳などに見られます。

埴輪列 前方部前面に、据えられた状態の埴輪列を7基確認しました。7基の内、2基の埴輪は墳丘裾のラインに並行して据えられていますが、残りの5基は古墳の北東に向かって45度の角度で据えられています。通常、古墳の埴輪は墳丘の裾のラインに沿って据えられますが、今回確認した埴輪列は古墳裾のラインから屈曲するように据えられていることになります。

埴輪の時期は5世紀後葉と考えられます。また、この埴輪列周辺からは形象埴輪の破片や須恵器の小片が少量出土しています。この埴輪列がどのような配置で展開するのか、今後の調査で明らかにしたいと思います。

造成痕跡 調査区東側端で東へ一段下がる段差を確認しました。この段差は、レーザー測量で確認した直線地形と位置が合うことが分かりました。直線地形の痕跡を発

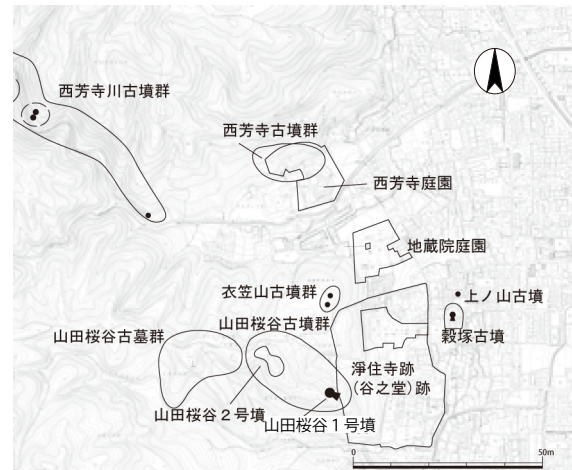


図2 調査地配置図 (1 : 5,000)



図4 調査区西部全景 (南東から)

掘調査でも追認することができました。古墳造営時の造成ラインの一端を検出したと推測されます。

今回、初めて山田桜谷1号墳の発掘調査を実施することができました。今まで古墳の構造の詳細は明らかになっていませんでしたが、今回の調査成果によって、葺石や埴輪列が伴うこと、古墳造営に伴う造成痕跡の存在を確認することができ、山田桜谷1号墳の様相を知る上で大きな成果となりました。今後は今回確認した以外の外 表施設の存在や埋葬施設の状況確認など、山田桜谷1号墳の解明に向けて調査を進めていきます。

(清水早織)

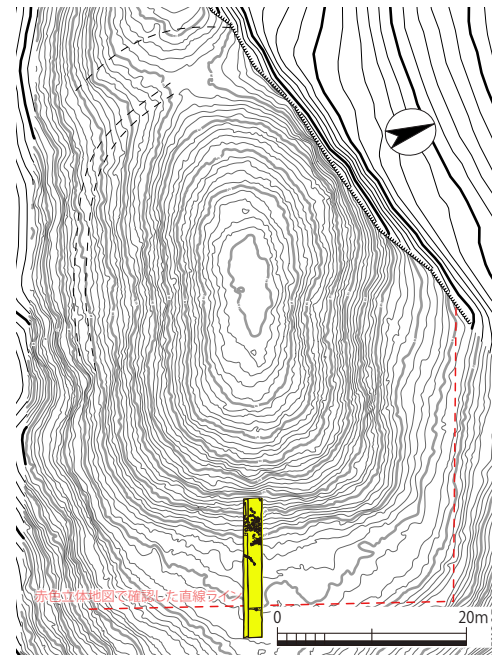


図3 調査区配置図 (1 : 800)



図5 葺石検出状況 (北東から)



図6 埴輪列検出状況 (北東から)